日本大学総長選挙の魑魅魍魎㊥

副総長をも籠絡する「黒い金」

膨大な年度予算と100万人の卒業生を抱えるマンモス教育機関「日本大学」。その巨大組織の頂点である「日本大学総長」の3年に一度の総長選がいよいよ6月19日に迫っている。前号でも伝えた通り、総長選挙の度に権力闘争が繰り返され、建設業者からのリベートを原資とした多額の「黒い金」がばらまかれるなど、そのなりふり構わぬ露骨さは、国から多額の補助金を得ている学校教育の場とは程遠い、魑魅魍魎が渦巻く世界なのである。

田中派主導の理事会運営

日本大学臨時理事会がこの4月25日に開催された。この臨時理事会の席上、次期総長の候補者を推薦するための「総長候補者推薦委員会」の委員66名が選出された。日本大学総長選挙規則により、この委員66名により推薦を受けた人物だけが総長選挙に出馬することができる。推薦委員66名の内訳は、日本大学理事（定数32名）の中から投票により選ばれたもの12名、本部教職員から選ばれたもの3名、各学部から学部長ら3名ずつ、14学部の計42名、通信教育部から1名、短大から3名、付属高校校長から選ばれたもの5名による構成とされている。

この推薦委員の選定をめぐり、臨時理事会は大荒れに荒れ、午後1時の開会から午後10時の閉会までの約9時間もの間、激論が繰り広げられた。この場で選出される推薦委員66名の顔ぶれが、次期総長を決定付ける分水嶺ともなるため、時に怒号が飛び交う場面もあったという。ここで選出された推薦委員により、5月13日に「総長候補者推薦委員会」が開催されるが、ここで無記名投票が行われ、仮に有効投票の3分の2に相当する44票を獲得した候補者が、出た場合、6月19日の本選挙を待たずしてその候補者が即日総長に決定されるというのである。

臨時理事会の議長は、小嶋勝衛理事長（兼総長）が務め、推薦委員の選出方法についての議題を提出したが、渦中の「悪い噂」の絶えない人物である田中英壽常務理事派の理事らからことごとく反対を受け、議題の提案さえままならない状況だったという。この席で、小嶋氏擁護の発言をした理事は、田中派の理事から「あんたに反論すると、外でブスッと刺されるかもしれないからな」と物騒な言い回しでけん制されたり、また、小嶋総長が意見を述べれば、すかさず田中氏から「ふざけたことを言うんじゃねぇ」という大学理事会の席にはあまりふさわしくない言葉で阻止されたりしたという。

小嶋派の理事たちも、じっと押し黙るしかなかった様子で、「まるで暴力団に脅かされているような圧力を感じ、怖くてとても反論できるような状態ではなかった」（日大関係者）という。結果、理事会から選出される推薦委員12名の枠のうち10名を田中派が独占し、推薦委員66名の大半も田中派で固められた。田中氏グループが発注した学内施設の建設業者らに調達させたと噂される「黒い金」のばらまき作戦が功を奏したようだ。

田中氏は、予想通り、副総長で生物資源科学部長の酒井健夫氏を総長候補として担ぎ出した。4月初旬、向島の料亭「波村」で、田中派のある学部長の再選祝いが催されたが、この席で「酒井先生を次期総長候補として擁立する」と酒井氏本人を前にして田中氏が宣言したため、翌日の学内は大揺れとなった。酒井氏は無派閥で、田中派の会合に参加はするものの、本籍は別と見られていたからだ。学術者として立派な経歴を持つ酒井氏が、何ゆえ、「悪い噂」が絶えず、暴力団関係者とつながりがあるとされる田中氏の支援を受け入れ、立候補を決意したのか。

田中氏の黒い人脈については文部科学省も熟知するところで、前回の総長選同様「田中理事長案」に強い難色を示すことが予想される。また、学内教職員の多くが田中氏を敬遠していることは酒井氏自身も承知しているはずで、教育者としての立場を考えて、栄えある日大総長を公正明大に目指すならば後ろ盾としては最も避けたい人物であるはずだ。しかし、酒井氏が田中氏の支援を受け入れたことをめぐっては、金銭がらみの信じがたい噂もあり、田中氏と手を組まざるを得ない事情に陥っているであろうことは想像に難くない。

「某調査報告書」を封印しているという小嶋勝衛日大総長・理事長

田中派の決起集会が行われたホテルグランドパレス3階の「鶴」の間（5月12日夜）

明暗を分けた候補者推薦委員会

本選挙を待たずして、「総長候補者推薦委員会」の席において酒井氏を総長に決めなければならない田中常務理事派の動きは激しさを増した。委員会直前の5月11日、12日の両日夜、東京・九段のホテルグランドパレスで決起集会を開催した。この集会で、酒井氏支持の最後の票固めを図ったようで、50名前後の参加者が認められた。

しかし、5月13日午後2時から日大本部で開催された「総長候補者推薦委員会」の投票結果は、小嶋氏が19票、酒井氏は40票、委員会の直前に出馬表明した島方洸一・文理学部長が6票、棄権1票で、3分の2を獲得した候補者はなかった。この瞬間、6月19日の本選挙の開催が決まり、小嶋氏と酒井氏の本選挙出馬が決定した。事前の票固めに遁走した田中派であったが、票の流出は避けられなかったようだ。

本選挙が確定したことで、先の推薦委員会で6票を獲得した島方文理学部長が、一躍キャスティングボードを握ることになった。島方氏は、クリーンなイメージで日大内部の自浄作用を望む教職員からの人望も厚いため、本選挙で投票権を持つ教職員約2800名の票は島方氏が付いた派閥に流れる可能性が強いためだ。委員会直後、両派が島方氏の取り込みを図ったようだが、島方氏は小嶋総長と共同路線を組む決意を固めたと伝えられている。

小嶋・島方連合VS酒井・田中連合の戦いは、日大教職員らの清き一票により争われることになったが、今回の本選挙の結果が日大の学内浄化の最後のチャンスともいわれている。なぜなら、この選挙で小嶋氏が再選を果たせなければ、彼が現在封印しているという「某調査報告書」が開示される機会は永遠に失われるからだ。

（次号に続く）

総長選に揺れる日本大学。写真は東京・九段にある日本大学会館（本部）